

胆振地区 新規就農者紹介



【農業の道を志す】

幼少期より、祖父母が営む牧場で酪農に親しみ、飼育されていた牛に深い愛情を抱いて育ちました。その想いは今も変わることなく、祖父母の志を受け継ぎ、牧場を継承しました。

【就農までに学んだこと】

農業系の大学に進学し、卒業後はスイスで1年間、アニマルウェルフェアに基づく放牧酪農を学びました。その経験をとおり、乳牛が快適に過ごせる環境づくりの重要性を実感し、将来は放牧酪農を取り入れることを決意しました。帰国後は隣の牧場で働きながら、より実践的な知識や技術を習得し、就農時にはお祝いとして牧場主からジャージー種の成牛2頭を譲り受けました。



譲り受けたジャージー種

2025年6月取材

酒井 美咲子 さん（苫小牧市）

就農年：2024年4月

経営形態：酪農

飼育牛：ホルスタイン種 10頭（育成牛10頭）

ジャージー種 3頭（成牛2頭、育成牛1頭）

【牧場経営を開始】

祖父母には以前より牧場を継承したい旨を伝えていたことから、牛舎を改装し、大切に残してくれていました。そのおかげで、初期投資を大幅に抑えて牧場経営を開始することができました。就農後は、国の支援策である補助事業を活用し、乳牛をはじめ、放牧環境を整備するための電気柵やワイヤーロープ、バケットミルカー（搾乳機）、ボイラーなどを導入し、経営基盤の整備を進めました。



大切に残してくれた牛舎



土地は使用賃借しています

【活用した補助事業】

・農業次世代人材投資事業（経営発展支援事業）

季節性の光熱費として、冬の寒さで牛舎の水道管が凍結しないよう、ヒーターを使用しています。今後は、夏の暑さ対策として扇風機や、来年の生乳出荷に備えて、搾乳後の生乳を冷却・冷蔵するための貯蔵タンク（バルククーラー）の導入も予定しています。

【牛とともに歩む、夢への一步】

牧場経営には、牛の飼料費をはじめ、牛舎や設備の維持管理費、光熱費など、想像以上に多くの経費がかかりました。なおかつ、現在飼育している牛はまだ育成段階で、生乳の出荷は来年を予定しています。それに伴い、出荷までの期間においても安定した収入を確保するため、午前中は近隣の牧場でアルバイトをし、午後からは自分の牧場に戻って牛の世話に励む日々を送っています。体力的には決して楽ではありませんが、牛と向き合う時間には大きな喜びがあります。一頭一頭の成長を見守りながら、少しずつ夢に近づいていることを感じています。



元気に育つ、無邪気な子牛は、日々忙しく仕事に追われる酒井さんの癒しとなっています。

【お休みの過ごし方】

生き物の世話には休みがありません。掃除や給餌はもちろん、急な体調の変化もいつ起こるかわからないため、常に気を配る必要があります。それでも、心身の健康を保つためには、気分転換の時間も大切です。祖母や両親に業務の一部をお願いして、休憩時間をつくるようにしています。短い休憩ではありますが、近場をドライブしてリフレッシュするのが日課です。



清掃がきれいに行き届いた牛舎で気持ちよくお昼寝をする牛。

生乳の出荷が始まれば、収入にも余裕が生まれ、農業ヘルパーを雇って長期休暇を取ることも可能です。そうなれば、大学時代に過ごした青森県を訪れたいと思っています。

【人とのつながりが支える日々】

今までの出会いが、現在の牧場経営の支えとなっています。

JAとまこまい広域の様々な支援。

悩み事は、スイスで共に学んだ仲間達に相談。

以前、勤めてた牧場主が経営に関して教えてくれる。

支援

父からはトラクターの操作方法を教えてもらった。

ご近所さんが草地の播種から刈り取りまで一連の作業を手伝ってくれる。

獣医からは医療の知識を教えてもらったり、時間に関わらず駆けつけてもらっている。

【今後の展望】

牧草の栽培と牛の飼育を組み合わせ、資源を無駄なく活用する「循環型農業」に取り組みたいと考えています。将来的には、30頭規模の放牧酪農を目指していますが、牛一頭一頭としっかり向き合いたいため、頭数をそれ以上増やす予定はありません。現在は草地として貸している農地も、今後は適正な頭数に応じた放牧地として、自らの手で管理していく予定です。経営が軌道に乗れば、加工品の製造・販売などの「6次産業化」も視野に入れています。この牧場を、将来にわたって守り、育てていけるよう、日々の一步一步を大切に積み重ねていきたいと思っています。

【酪農家になりたい方々に伝えたいこと】

牛の健康管理はとても大切です。牛は言葉を話せない分、体調の変化を行動や表情で示します。その小さなサインを見逃さず、的確に判断するためには、「観察眼」を養うことが欠かせません。牛の様子をよく観察し、変化に気づける力を身につけてください。